

第 37 回日本ジオパーク委員会議事録

日時：2019 年 10 月 3 日（木）13：30～16：20

場所：永田町合同庁舎 1 階 第 1 共用会議室

<委員長>

中田節也 東京大学名誉教授・防災科学技術研究所火山研究推進センター長

<副委員長>

黒田乃生 筑波大学芸術系教授

<委員>五十音順

欠席 池田高世偉 隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会会長・隠岐の島町長

大野希一 島原半島ジオパーク協議会事務局次長

久保純子 早稲田大学教育学部教授

齋藤文紀 島根大学研究・学術情報機構エスチュアリー研究センター長・教授

佃 栄吉 産業技術総合研究所特別顧問

欠席 矢ヶ崎紀子 東京女子大学現代教養学部教授

渡辺綱男 自然環境研究センター上級研究員

渡辺真人 産業技術総合研究所地質情報研究部門・ユネスコ世界ジオパークカウンシル委員

<調査運営部会長>

宮原育子 宮城大学名誉教授・宮城学院女子大学現代ビジネス学部教授

<日本ユネスコ国内委員会>

秦 絵里 文部科学省国際統括官付国際統括官補佐

齋藤 彩 文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係長

<関係省庁（オブザーバー）> 建制順

中山隆治 内閣府 地方創生推進室 参事官

松尾泰明 内閣府 地方創生推進室

柚木脇大輔 内閣府 地方創生推進室

高橋麻衣子 外務省 大臣官房国際文化協力室

西城純華 外務省 大臣官房国際文化協力室

柴田伊廣 文化庁 文化財第二課 文部科学技官

渡辺洋太 経済産業省 産業技術環境局 基準認証政策課 知的基盤係

青柳雄也 国土交通省 水管理・国土保全局砂防部砂防計画課地震・火山砂防室 火山対策係

今西千妃路 観光庁 観光地域振興部 観光資源課 新コンテンツ開発推進室 主査

井 智史 気象庁 地震火山部 火山課 火山防災情報調整室 噴火予知調整係

荻野 周 環境省 自然環境局 国立公園課 国立公園利用推進室 エコツーリズム推進専門官

<事務局>

斉藤清一 JGN 事務局長

古澤加奈 JGN 事務局次長

野邊一寛 JGN 事務局次長

水野恵美子 JGN 事務局員

畑中真澄 JGN 事務局員

山崎由貴子 JGN 事務局員

<開会・委員長挨拶・報告>

委員長：前回の委員会が1月に開催され、9か月程が経過したが、その間に調査運営部会が開催された。本日はその結果について議論をしていただきたい。また、議題④では来年度以降の委員会の体制について意見交換をお願いしたい。更に、この9か月の間の出来事を紹介すると、ユネスコ世界ジオパークの新規認定審査と再認定審査が行われ、日本のユネスコ世界ジオパークからは3地域が再認定審査を受けた。洞爺湖有珠山、室戸、アポイ岳で現地審査が行われ、JGCから委員が同行して審査を見守った。また、ユネスコ世界ジオパークを審査する審査員は日本に8名おり、合計12地域に出向き現地審査を行った。審査員は現地審査だけではなく、他国の仕組みや情報を日本に持ち帰る役割も担っている。現在ユネスコ世界ジオパークは147地域あり、それら地域が4年に一度再認定審査があるので、毎年約4分の1の地域が再認定審査を受ける。さらに毎年新規認定審査が約10地域あるため、毎年約50地域の審査が行われている。1地域に2名ずつの審査員が赴くため、延べ約100人の審査員が必要となっている。審査員は1日の研修を経てテストを受けることになった。合格すると正式のEvaluatorになることができる。日本もこの試験制度を導入しても良いかもしれない。また、9月の初めにアジア太平洋ジオパークネットワークのシンポジウムが開催された。4日間程インドネシアのロンボク島に集まり、それぞれの経験や活動紹介などの意見交換がされた。全体の参加者は600人ほどで、そのうち日本からは70人程参加した。このシンポジウムに先立ち、ユネスコ世界ジオパークカウンシルの会合が開催された。そこにはカウンシルメンバーの渡辺委員、オブザーバーとして大野委員と事務局が参加。この会合では、夏の現地審査結果について議論された。この結果は、一昨日ユネスコのHPに掲載された。日本からの申請は2016年以降ない。日本からもできるだけ早く出せるようにしたいと思う。今日はその可否についても議論するので、活発な議論をお願いしたい。

その他何か報告事項があれば、まず事務局から。

事務局：昨年山陰海岸と阿蘇にてユネスコ世界ジオパークの再認定審査が行われたが、その結果が2月に通知され、2地域ともグリーンカードだった。この結果はJGCのHPにも掲載している。今春に国内推薦・日本ジオパークの新規申請地域を募集したところ、3地域から申請があった。3地域については、5月25日に幕張で日本ジオパーク委員会調査運営部会が開かれ、公開プレゼンテーションと申請書類に基づいた評価により、3地域とも現地審査を行うことが決まり、今夏に行われた。台風や大雨の影響を受け、2地域が当初の予定から変更を余儀なくされた。更に、審査員も各地域3人のうち1人ずつ変更したが、最終的には無事に実施することができた。また、9月14日には今秋の日本ジオパーク再認定審査を受ける予定の9地域について情報共有会が開催された。なお、先ほど委員長より報告があった、カウンシル会合の結果については、各地域への公式な通知や議事録の開示がまだなので、事務局からいつになるのかを照会している。

委員長：今の報告について何かないか。また、他の委員の方も何か報告はないか。特にないようなので先に進みます。何かあったら委員会の最後をお願いしたい。

<議題①ユネスコ世界ジオパーク国内推薦申請地域 JGC 調査運営部会報告・審査【Mine 秋吉台】>

委員長：資料2がJGC調査運営部会より提出されている。これから議論していくが、資料2によると、Mine 秋吉台ジオパークのユネスコ世界ジオパーク国内推薦は見送りという評価になっている。また、この地域は日本ジオパーク再認定審査も兼ねているが、こちらは再認定という評価。今日は調査運営部会の部会長と副部会長が出席されているので、二人で分担して説明いただきたい。

部会長：9月14日に部会で3件の現地審査報告を検討した結果を、本日提案させていただく。最初にユネスコ世界ジオパーク国内推薦を申請したMine 秋吉台、次にエリア拡大を申請した桜島・錦江湾、そして最後に新規認定申請を行った五島列島の順で報告する。最初に副部会長から、Mine 秋吉台について報告を。

副部会長：Mine 秋吉台の調査運営部会での評価結果を報告する。スライドで現地の写真や審査の様子を映しながら説明する。Mine 秋吉台は、日本を代表するカルスト台地や鍾乳洞が見られる場所。およそ4億年から3億5千万年前に日本列島に付加した付加体と、それに伴って形成されたスカルン鉱床などの地質資源

が見どころ。拠点施設として、カルスターというカフェであり地域住民が集う公共施設ができ、大きな賑わいを見せている。また、地域の人の交流も活発に見られるようになった。現地審査の様子として、長登銅山について、ここはスカルン鉱床の一つで、この銅が奈良の大仏に使用されており、文化的価値を持っている。その価値を発信していく拠点として歴史民俗資料館や化石館などもあり、拠点施設も充実している。結論から言うと、日本ジオパークとしては、調査運営部会は再認定という評価を出した。理由は、A3サイズの資料にまとめている。日本ジオパークとしての価値の評価点として、拠点施設のカルスターが挙げられる。ここでは来訪者だけではなく、地域の人たちとの様々な交流が図られており、ジオツアーの拠点としての役割も果たしている。また、山口大学を含めた学術研究者との連携が強化され、地質的な価値の担保ができるようになっている。学校教育に関しては、美祢市が教育委員会を通じて市内全小学校にジオツアーのための資金を供給するなどジオパーク学習が充実している。更に、カルスターを活用してジオカフェや地域住民同士の活動が活性化している。このようなところから、日本ジオパークの活動としては前回の指摘事項も含め十分に対応できているとみなして、認定の評価をしている。その一方で課題として、博物館施設の展示設備が古いなどの指摘があり、改善を図ってほしいという意見が挙がった。また、歴史文化遺産に対して整理をしたほうが良いというコメントも出た。

これに対して、ユネスコ世界ジオパークの国内推薦候補地としては見送りという評価を下した。大きな理由として、有名な観光地である秋芳洞の入り口の土産物屋で、外国産の物を含めた岩石・鉱物試料がいまだに販売されていることが挙げられる。ユネスコ世界ジオパークの基準では、他国の鉱物資源を工業製品ではなく装飾品、嗜好品として販売する行為を厳しく規制している。この部分に対して、地域住民と深く協議をし、今後対応をどうしていくべきか議論する必要があるということが指摘として挙げられている。また、ユネスコ世界ジオパークでは国際的な地質学的価値を示していくことが求められる。世界中には、Mine 秋吉台をはるかに凌ぐ規模のカルスト地形や鍾乳洞がたくさんある。そのため大きさという面ではなく、なぜ Mine 秋吉台に来てカルスト地形や鍾乳洞を見るべきであるのかという部分の学術的価値を発信し強化してほしいと考えている。そのためには、学術関係者との更なる連携を行っていく必要がある。このようなことから、ユネスコ世界ジオパーク推薦は見送りという判断に至った。

委員長：ありがとうございます。Mine 秋吉台には私が現地審査員で行った。報告のとおり、ボトムアップ活動は進んできており、そういう意味では、日本ジオパークとしては十分やってきている。世界申請をするにあたって、来た人に対して何を持って帰ってもらうか、自分たちの価値を十分にガイドの人が語っていない。鉱物の販売について、ずっと課題になっているが、具体的な対策がまだとられていない。世界に申請すると、必ずこの点が突っ込まれる。これについての対策がまだできていないということで、世界申請は時期尚早であるという判断を下した。秋吉台、秋芳洞というのはかなり日本的には有名だが、秋芳洞のジオパークとしての面白さやユニークさを十分に語られていない。それが非常に残念なところ。それについては事務局もよく理解していて、そこをできるだけ審査では見せないようにしている、そういうところもまだ見られた。以上が私からのコメント。これ以外にご意見やコメントがあればお願いしたい。

委員：対象地域全体の保全計画を立てて、保全の水準を上げていくという点に関して、申請書の中身を見ると、保全計画の検討もされているという話が出てくるが、この地域はカルスト台地や鍾乳洞などを対象にした国定公園に指定されている。最近になってちょっと珍しいタイプだが、地下水系の生態系が非常に特有であるということで、ラムサール条約の登録湿地に加わったという動きもある。また、そもそも文化財行政の中で、色々な政策が行われてきた。色々なことが重なり合って、保全や管理が進んできたと思うが、ユネスコ世界ジオパーク推薦を目指す過程で、色々な制度をうまく連携させて、地域全体の保全の水準が高まるように、個々の施策がばらばらになっているのではなく、ジオパークの取組とラムサールや国定公園や文化財等の色々な手段をうまく組み合わせて、お互いに相乗効果を発揮して、保全水準が高まるようなことを、世界申請に向けた努力をする中で進めるというのは重要と感じた。今後さらに世界にチャレンジしていくプロセスの中でそういうことも是非一生懸命やってほしいというメッセージが伝わると良い。メンバーも、国定公園

は県の自然環境部局が担当しているが、協議会のメンバーを見ると、総合企画や産業戦略という観光関係の部局が担当している。協議会メンバーの中にも、県の国定公園を担当している自然環境部局、実際は色々絡んでくれているのかもしれないが、その辺をしっかりと管理をしてもらって、全体の水準が高まるような努力をしていけば良いのではないか。

委員長：良いご指摘をありがとうございます。現地審査の時に保全について色々問い合わせるが、これは国定公園だからとか、ここは特別天然記念物だからとか、そういう説明はあるのだが、具体的にどう取り組んでいるのかということは、秋芳洞の保全計画というのは遅々として進んでいるという程度の説明はあるが、全体を連携させて全体に価値を高めるということはまだ十分ではないような気がする。その点について、誰か情報を持っていないか。

委員：中国のカルストや鍾乳洞はスケールが大きいので、あまり比較にならないが、まず一つは、中国の審査員が来た時に、地元の人が雄大な地形と説明すると鼻で笑われる。科学的に、ここは中国の石灰岩とは違った高い価値があるということを伝えられることが大事。保全の面からだ、ヨーロッパの審査員が来た時にあの鍾乳洞を見られると、鍾乳石が緑色になっている、光はあて放題であるということから、この程度の鍾乳洞の保全で良いのかと突っ込まれることは確実。価値の面、鍾乳洞の保全の面、どちらもまだやる必要がある。通る通らないという話から見てもある。

委員長：ありがとうございます。他に何かないか。

委員：地学的規模の大きさという話があったが、そこで勝負しても仕方がないというのは明確なので、文化的価値というか、そこで生きてきた生き様のようなところ、オンリーワンであるという見せ方をすべきだと思う。彼らもその点は色々やっていると思うので、それを見せていくということが非常に大事だと思う。そこをどんどん強調していくと良い。色々な作物だとか、色々な情報が出たと思う。あとは、秋芳洞入り口までの「門前町」の石灰岩商品の販売については解決まで時間がかかると思う。協議会の言い分としては、販売されている方が自主的におやめになるまでは無理じゃないかとか、色々言っていた。ただ、若い人たちが結構入り始めているので、うまく連携して、おもしろい門前町を作って、わくわく感のある入り口にしてくれると非常に良いと思う。一気に市が買い取るなりしない限りなくならないと思う。それがずっと悩みで、どうして今回申請するのかということは、私も少し疑問があった。博物館については、ここに建設計画といって新しくリニューアルを計画しているというのがあった。これはどのくらいの規模でやろうとしているのか。ちょっと小手先で直そうという感じなのか。

委員長：かなり本格的に、美祢市が山口大学と相談して、総合博物館を作るような構想。ただ、その時、今ある博物館をどうするのかという方針が全くなく、博物館同士の連携も取れていないという状況の中で、新しいものを作るだけではなく、その連携を図ってほしいという提案にしている。

委員：別に作るということか。

委員長：別に作るということ。

委員長：化石販売、鍾乳石販売については、販売している人達は売り続ける限りは、ユネスコ世界ジオパークのガイドラインに抵触しているということは十分分かっている。分かっているが、自分たちの生活がかかっている、どうしようもないという判断。事務局の方は、市が全部買い上げてということも考えているが、膨大な予算を伴うので、それも難しい。化石の販売に関してはユネスコ側の考え方も変わってきているので、それをうまく活用して、全部一か所に集めて、そこだけで販売し、ジオパークの組織の外に置くということでも解決可能である。こういうことを考えないと難しいと感じた。価値については、学術的には付加体の中にある非常に新鮮な石灰岩で、それが世界でも非常にユニークだと協議会は言っているが、来た人に必ずしも伝わっているわけではない。この地学的な価値については、外部にレビューをお願いした。これは初めての試みで、ユネスコ世界ジオパークでは、申請書の地質の部分を IUGS（国際地質科学連合）に依頼して、レビューをしてもらっているのと同じ。今回は地質学会の方を含めた3名にレビューいただいた。レビュー結果は、現地審査に行く前に審査員で共有して、どういうところが価値として売り込めるか、あるいは現地

の人はどこまで認識しているか、その確認のために非常に有効に使うことができた。この仕組みについては、今後も主に地質学会を通して依頼するという形にしたい。レビューされた方にアンケートを書いていただいたが、そんなに時間はかからなかったとか、もう少し詳しいデータが欲しいとか、そういう意見はあるが、非常に好意的であった。

委員：情報をお願いしたいのだが、石灰岩をベースにして、接触変成のある長登銅山は割と近い話題かと思うが、三畳紀の地層があって、無煙炭層の取組というのは、私としてはだいぶ遅れているという印象を持っている。どういった感じか。

委員長：無煙炭の見せ方のことか。

委員：見せ方というか、石灰岩台地と鍾乳洞、長登と一体感があるような気がするが、三畳紀は時代的には近いと言っても、ジオパークとしての一体感をどう作り上げようとしているのか、というところ。

委員長：あまり価値がうまく説明されていない。

委員：三畳紀の地層で、環境的にはだいぶ違う。

委員長：ペルム紀から三畳紀で、三畳紀の地層の中に無煙炭があると。それが日本の戦前の文化を支えたなどの説明はあるが、それ自身が全体の価値のなかでウエイトを占めているような言い方はなかった。

副会長：地質学的なバックグラウンドとしては、ジオダイバーシティの活用という部分では、現地から報告があって、例えば無煙炭の露頭がアクセスしにくいので、そこの整備をしようとか、もう少しそこを活用して、例えば小学校の学習のサイトとして活用していこうという流れは報告があった。

委員：関連するが、カルストと鍾乳洞以外いろいろ言っているが、鉱山もあまり見るところがないし、無煙炭も野外で見れる場所がない。その辺がジオパークとして弱いと感じる。世界審査の時に、3日間どこに連れていくのかという心配はある。サイトが足りないのではないか。

委員長：審査で行った時も、無煙炭の露頭は雨のためアクセスできなかった。唯一の露頭も行けなかった。現地としては、ペルム紀から三畳紀にかけて生物の大量絶滅があった頃の地層だと宣伝している。全体のストーリーの中で、疑問に感じるころはある。

委員：見に行きやすい露頭もあまりない。一生懸命整備しているのか。

委員長：そこは無煙炭を掘っていたところを、宇部興産が持っているので、宇部興産から市が寄付していただいて、そこへのアクセス道路も宇部興産が作った。こういう形で宇部興産と非常に仲が良く、無煙炭の露頭を見せる仕組みはできつつある。

委員：三畳紀の昆虫化石をずっと学校の先生が集められて、その膨大な資料があった。先ほど言われた博物館の計画の中で使われるのかなと想像するが、あれ自体ももったいない。ただ、建物が古くて見せる環境ではないので、あまり手を振って見せていないところはある。

委員長：とにかく、すごい立派な化石がいっぱいある。それを所狭しにどんどん置かれている。展示の説明もちょっと古いものも多い。第四紀の境界も古いままになっている。そういう博物館関係でクリアしないといけない問題はたくさんある。

委員長：それでは、ユネスコ世界ジオパーク国内推薦としては見送り、日本ジオパークとしては再認定ということで問題ないか。

各委員：異議なし。

<議題②新規認定地域（エリア拡大）JGC 調査運営部会報告・審査【桜島・錦江湾】>

委員長：続いて議題②桜島・錦江湾のエリア拡大について、調査運営部会より報告願いたい。

副会長：桜島・錦江湾は、既に錦江湾周辺が日本ジオパークに認定されており、今回は、エリア拡大部分の審査を行ってきた。具体的には、鹿児島市、始良市、垂水市の3つの市の境界線をジオパークのエリアとして、再申請するもの。これまでは鹿児島市の桜島を含むごく一部が、ジオパークのエリアとして認定されていたが、それを行政境界に合わせた形。新しくエリアが拡大するということは、地質学的な見どころが増え

ということなので、そのあたりを主に現地審査で確認してきた。寺山炭窯跡は、54 万年前に始良カルデラの縁で噴出した吉野火砕流が溶結している。その溶結して固まった石材を用いて、炭を作った後という文化的な価値を持つ場所。猿ヶ城溪谷は、新しく拡大された場所で、垂水市にあるもの。ここはNPO 法人がリバートレッキングなどの様々な活動をしている場所。もともと年間 1000 人程を受け入れているくらい、キャニオリングなどアクティビティとしての活動があった場所。鹿児島市ふるさと考古歴史館については、考古学的な価値がある地域がエリアの中に含まれたので、その価値を発信する拠点としての施設になる。主に縄文人の遺跡などを展示しており、縄文人とその当時の自然環境の関わりが分かる場所。新しく申請をする地域の首長達とのヒアリングも行われた。さらに、始良市にある「くすの木記念館」は、干潟等での自然環境、環境教育を主体的にやっている NPO 法人の拠点施設になる。この地域で新しく申請された地域を含めて、新しく桜島・錦江湾ジオパークとして認定するかという可否を部会の方で評価を行い、結果としては保留となった。論拠は、そもそも日本ジオパークではこれまで、認定する前から既にジオパークとしてふさわしい活動がある程度継続していることを求めてきており、それが一つの目安。そのためには、きちんとしたエリアの地図や看板の整備、特に看板については、看板の原稿だけではなく、どこの場所に設置し、誰がどのような管理をするかということまで含めた設置計画がほしい。なぜなら、ジオパークとして認定してしまったら、すぐにそこはジオパークとして見られるため、すぐにジオパークとしての体制を整備してほしい。残念ながら、新しく拡大申請しようとした地域では、そこまで見られなかったというのが審査の報告結果。また、複数自治体で運営をしていくと、運営体制の構築というのはなかなか難しい。拡大エリアの自治体職員が兼務という形でしか事務局に入ってこないという点で、持続的な形の運営体制を構築できるのか、不安要素がある。更に、拡大地域が増えて、今までは始良カルデラと桜島という、過去 3 万年より新しい出来事に対するストーリーが、今度は四万十層群というさらに古い時代、日本海拡大という数千年前の時代からその地域を語るストーリーが増えるはずだが、その大きなストーリーの構築もまだあまりできていない。体制としては不十分だが、既存の活動のポテンシャルがあり、先ほどのリバートレッキングや環境教育、また、小学校の教育活動なども一定の質は保っているもので、認定しないということではなく、きちんとした体制作りや計画が作られるまで、1 年を目処に保留とし、じっくり計画を作っていただきたい。そのうえで現地からの報告を受けて、委員会で評価、審議することとしたい。ちなみに、今の桜島・錦江湾のエリアはジオパークとして活動していただき、今回の拡大地域の申請のところだけ、保留という評価をした。難しい議論になるかもしれないが、委員の皆様のご審議をお願いしたい。

委員長：ありがとうございます。桜島・錦江湾は、現在は日本ジオパークだが、2017 年に世界推薦の申請をした。同時に霧島ジオパークも手を挙げた。世界に隣接した 2 つの火山地域が申請された場合、通るはずがない、と日本ジオパーク委員会で判断をした。もし申請するのであれば、両ジオパークを合体させた形で出す方が確実にという話だった。それにあって、桜島・錦江湾は現在のエリアが不規則で、桜島から直径 10km の円周を書いて、その中の地域と錦江湾の海のみを含めるといって、非常に不規則な形で認定されている。その形自身もおかしい。そのため、もっと地域を拡大しないといけな。そういう方向性に基づいて、今回はエリア拡大という形で申請されている。もちろん裏では世界を目指しているが、委員会としては拡大したものが、日本ジオパークとしてふさわしいかということに基づいて審査をしたい。追加される地域は垂水市と始良市、また、鹿児島市は今まで非常に不規則な、市街地だけが円周で少しかかる形だったものを、鹿児島市全体に南方まで広げた。エリアは 3 倍程の広さになり、そこでの活動が、調査運営部会の報告だとまだ見られていない。そこを統括する体制も確認できていないということだった。委員の方、コメント、意見ををお願いします。

委員：今回保留という扱いだが見送りとは、ジオパークの仕組みの中ではどういう違いなのか。

委員：世界ジオパークの例で行くと、見送りは reject。一から申請書から出し直すということ。保留の場合は申請書を出し直さず、いくつか解決すべき点が提示されて、それを解決したという報告書を提出し、それが承認されると通る。なので現地審査にも行かない。日本も同じ形を踏襲している。本当はこの報告書で条件

を明確にしないと、保留としては良くないのではと感じる。

委員長：世界では、保留はおおむね2年。日本では1年という形にしている。そこが違うが、考え方は同じ。この場合、桜島・錦江湾は、1年以内に指摘されたことをクリアできたら、委員会としてはエリア拡大を認めるということになる。

委員：垂水市と始良市が加わって、鹿児島市も含めて広域化されたということだが、それを検討してきた体制が錦江湾の湾奥会議。湾奥会議はこの3市に霧島市を加えたもので、そこで議論をしてきた。霧島ジオパークは山の方だと思うが、錦江湾を取り巻く自治体としては、霧島市も一員。しかし、今回、錦江湾周辺の霧島地域というのは入らず、垂水を始良だけが加わっている。このいきさつが分かれば教えてほしい。

委員長：霧島市は霧島ジオパークがある。霧島側は世界を目指していて、そこが領域拡大をして霧島市全体を入れるのであれば話は簡単だが、桜島・錦江湾ジオパークが霧島市の一部を取り込んで、エリア拡大とするのは、霧島市は納得しない。お互いに意見交換をしているが、具体的な話しは進んでいない。

委員：そうすると、霧島と桜島・錦江湾を一緒にするという話が整理されないと、桜島・錦江湾地域の霧島市側をそこだけ入れるというのは、霧島市が同意できないと、そういう関係にあるのか。

委員長：そうなる。霧島市が錦江湾にも入るという決断をしてくれると良いが、自分たちが今持っているジオパークで手一杯ということもあり、彼らの領域拡大という話にはなっていない。

委員：承知した。申請書の地図を見ると、ちょっとだけ抜けていて、違和感があると思い聞いた。

委員長：もともと錦江湾エリアも海側だけ。霧島市も面しているが、そこを入れていない。

委員：霧島は世界を目指していて、桜島・錦江湾の方は、今度四万十層群や沿岸の中新世の花こう岩も入って、違うものが入ってくることになるが、それでもやはりユネスコ世界ジオパークを目指しているのか。

副会長：体制としては目指している。というのは、今回のインドネシアの会議も含めて、国際会議にも頻繁に参加していて、日本には桜島・錦江湾というジオパークがあることは世界に発信し続けている。ただ、桜島・錦江湾単独として申請しても、これ以上日本に火山のユネスコ世界ジオパークはどうか、という話しも出ているため、一つの作戦としては、霧島も同時に並行してやろうとしていたため、一つの南九州ジオパークのような形で出していけば通る可能性がある、という suggestion。それを受けて2つのジオパークが準備を進めてきて、もう2、3年続いている状況。それぞれ世界に出す気はある。

委員長：今度は花こう岩地域も入るということだが、特に火山地域に特化した形で、桜島・錦江湾は拡大エリア、ということではないので、基盤岩の地質多様性を含めた形で申請し直しているということ。

委員：霧島と将来一緒になる時に、ここだけ異質なような気がした。

副委員長：保留ということで2つ条件が付いているが、1つ目はマップや看板等の作成ということで割と簡単にできそうだが、2つ目の本当の意味での地域を超えた連携みたいなものは、1年でできるのか分からない。それでも、保留という形にすることの意義は。また、例えば世界遺産だと、世界遺産の価値を示すのに十分なエリアを総合して、すべての価値を証明する資産が含まれていないといけないというのがあるが、ここで霧島が抜けることで、このジオパークの価値を示す十分なエリアが3市で示しているのか、というのは世界の審査では問われないのか。

委員長：問われると思うが、ジオパークはいかにうまく運営しているのかということが評価される。その場合、地質遺産としてはもっと含めなければいけないが、全域では運営できないので、運営しやすいユニットとしてある地域を申請するという形はあり得る。理想的には霧島を入れた形で出すのが良いと思う。また、何を訴えたいかによって、例えば花こう岩地域を外すということも可能性としてはあると思う。

委員：手続きについて、1年後の保留の審査の際には、イエスカノーしかないのか。それとも再度保留というのはいり得るのか。

委員：世界の例で行くと、保留して期限の間にレポートが出てこないということが時々ある。出てきて reject ということもあった。保留の期間内に通るところまでいかないと reject。

委員長：reject されても、その後何年間は出せないということはない。翌年出そうと思えば出せる仕組みであ

る。

保留は、少し待ってあげますよという親心のようなもの。1年以内に体制が整備できるかどうかというのは、難しいのではないかとということだが、現在既に取り組み始めている。お互いに定期的に会合を開くということをやっている。ただ、事務局が鹿児島市側だけであって、そこにみんなが通うとか、web上で会議をやったりするので、そのあたりをもう少し、きちんと動くことができる、見える形に変えてくれることが必要だと思う。あとは、案内板等はほとんどできていないので、マップを作って案内板を整備すると、それだって1年くらいで可能だと思うし、定期会合もきちんとやる、それから、将来的にどういう体制にするという展望を出せれば、可能ではないか。

委員：保留の場合は書類の提出だけか。

委員：これまでは書類の提出だけ。

委員：一緒になって合流して、というのは今までを見てもすごく時間がかかったり、失敗する例もあるので、本当に1年でできるのかというのは、私自身は相当危惧している。鹿児島市は地域のリーダーなので、それなりにやってくれるかもしれないが、本当に地域の人たちが参加して、一体感を持ってできているというエビデンスをどう見せてくれるのかは危惧している。1年というのは非常に短いなど。今までの蓄積がどこまであるのかが見えていないので、あともう少しなのか、今からこの体制を作ってやっていくのか。1年でも良いが、心配している委員もいるということ強く伝えておいてほしい。

副会長：現地審査の報告の限りでは、首長レベルでは非常に前向きである。鹿児島市とともに連携して取り組んでいきたいという声はいただいている。九州内での連絡会の中にも、それぞれの市の担当者が出てきて、ジオパークに関してかなり前向きに関わりたいという話が、担当者レベルではできている。あとは首長がどう判断されるか。1年で大丈夫かといわれると、それは私も分からないが、あまりジオパークという考え方が広まらない状態で大きな体制をポンと作ってしまうと、うまくいかなくなるということが出てくる。実際そういうところも出始めている。そこはどのような伝え方をするかではあるが、着実かつ早めに体制を強化してほしいということ、委員も心配しているということをお伝えしたい。

委員長：保留か保留以外にするか、案のとおり保留でよろしいか。

各委員：異議なし。

委員長：それでは、1年を目処に保留し、再度判断するという形にする。

<議題③新規認定地域 JGC 調査運営部会報告・審査【五島列島】>

委員長：続いて、議題③五島列島の新規申請について、調査運営部会より報告願いたい。

部会長：五島列島は九州の最西端に位置しており、福江島をはじめとする5つの大きな島とその周辺の島々からなっている。今回の申請では、そのうち、南西側の五島市に属する福江島、奈留島を中心とする島々を申請範囲としている。五島列島のジオパーク構想は、五島層群と呼ばれる大陸由来の砂泥堆積層の基盤や、日本海形成と沖縄トラフに関わるマグマや活断層、断層活動による五島列島自体の配置や、第四紀の火山群など、非常に多様な地形が陸上や海上から観察することができる。鬼岳という単成火山では、こういうところでは野焼きをしており文化的な活動も行われている。五島層群の非常に大きな雄大な断崖の大瀬崎の方では、ハチクマの渡りという、渡り鳥の中継地点にもなっている。非常に多様な自然を持っている。そこに展開している離島の景観は非常に素晴らしく、人々が地質や地形を活用した多様な歴史、生活文化の豊かさというのは、ジオパークとしても非常に大きな可能性を持っているのではないかと思われる。現地審査では、協議会員から、非常に前向きな意欲のある意見をたくさん聞くことができた。福江島には、地元の山の湧水と地元で栽培した芋を使用した焼酎も生産されている。ジオとの関わりというストーリーの中で、こういったものが位置付けられると、より面白いジオパークになるのではないか。今回、8月15～17日の3日間で現地審査を実施した。非常に良い部分としては、離島の中で非常にダイナミックな地質地形が見られる。一方で地元の人たちのジオパークに対する熱意、協力体制も非常にできていると感じた。ただ、根本的な部分

で、皆さんからお話を聞いたり、ジオサイトを案内していただいたり、ジオパークとしての案内看板やパンフレットなどを現地でチェックしてきたが、露頭や地形などの部分の非常に専門的な紹介は色々あるが、それが例えば一般の方が来た時に、ここはジオパークでこんなことを学べた、それから人との暮らし、五島列島の色々な暮らしが、地域の成り立ちと深く関わっているというところ、実は深く関わっているものが周りにはたくさんあるが、そういうものがしっかりと説明されていなかった。ジオパーク関係者の皆さんたちの熱意は非常に感じられるものの、ジオパークの基本的な理念や目標をもう少し共有して、整備されたほうが良いのではと思った。もう一つ、可視性のことは申し上げたが、いくつか案内看板も整備し始めているが、内容が専門用語をずっと使っていて、難しい看板になってしまっている。また、大きな部分としては、ジオパークではジオガイドが非常に重要な役割を持っている。見えている風景をインタープリターという形で、自分たちの言葉で分かりやすく、ジオの色々なからくりを説明してくれるのが必要であるが、そういった役割をするジオガイドさんがまだ育っていなかった。今回現地審査でもガイドが案内をしてくれたが、五島列島で観光ガイドをしている方だった。五島列島は観光客が非常に多い。特に2018年にユネスコの世界文化遺産に登録されて、五島市にも一部その遺産があることもあり、観光としてのガイドは非常に優秀なガイドがいる。今回の現地審査も観光ガイド的な案内で、どうしてもジオパークとしての面白さを伝えきれていないということが難しかった。そこでヒアリングをしたところ、ジオガイド養成のための講座や、ガイド認定に係る色々な質保証の取り組みが間に合っていない。ジオパークの拠点施設として、市では来年から基本設計を始めるが、現在環境省と五島市が管理しているビジターセンターがあり、そこを来年から基本設計を始めて、しっかりとビジターセンターにしていくという話だった。来年を待たずして今の時点でもうジオパークの展示や情報を見たかったが、まだ整備が追い付いていなかった。ジオパークの中では、子どもたちの学習や一般の人たちへの認知を広めていくという部分と、教育の面で大人への教育、仲間づくりという部分はうまくいっているように思われた。が、小学校や中学校といった地元の子どもたちに、例えばジオパークの教育をしていくといったような部分で、まだ少し岩石見本を作って、石の名前が分かるといったような部分での活動ということになっている。ジオパークの役割や面白さという部分が、伝えきれていなかったかと思う。すべての活動が100%成就されていないといけない訳ではないが、今の状態だとようやくジオパークに対する色々な準備がスタートした段階だと感じた。以上のことから、今回は見送りという形で提案させていただいた。ただ、地元の皆さんは非常にやる気があるので、ジオパークの認定に近いところにはいるのではないかという印象を持った。

委員長：ありがとうございます。今の説明について、質問、コメントがあればお願いしたい。五島列島という名前についてはよろしいか。

部会長：現在、五島列島ジオパーク構想という名称で申請されている。5月のプレゼンの時にも質問が出ていたが、今は五島市1市で五島列島と名乗っているので、その点を聞いた。将来的には他の島、自治体も含めて仲間に入れてジオパークに整備していきたいということで、今は五島市1市でスタートするが、名称としては五島列島を使うということだった。

委員：今回見送りという評価だが、地域の科学者が大変熱意をもって取り組んできているということや、申請書の中にも機は熟してタイミングは今だと、そういう思いをもって申請してきている。なので、評価をして見送りとなったときにくじけてしまうのは残念だと思うので、認定に向けた具体的な道筋というか、こういう部分を強化していくという、その部分をできるだけ具体的にメッセージとして送ってあげることで、今後更に頑張ってもらいたいという方向に向けていければ良いのではないか。五島列島は古くから西海国立公園であり、最近になって文化遺産のサイトも五島列島の中に点在しているということでもある。文化財もあり、非常に自然の資源と文化的な資源が両方非常に豊富にあって、それがつながり合っているというのがこの地域の特徴だと思うので、今後認定を目指す中で、自然の資産の部分と文化資産の部分、それぞれの制度をうまく結びつけて、相乗効果を高めるようなところに力を入れるように、後押ししていくと良いのではないか。もう一つ具体的なものとして、以前から地域の情報提供施設として機能してきた鑑瀬ビジターセンター

を、ジオの視点を入れた形で2020年からリニューアルということは、今から考えないといけない時期に来ていると思うので、リニューアルの中身に対して、ジオの視点からすればこういうことが大事であることを伝える必要がある。単に展示だけではなく、鑑瀬ビジターセンターを拠点として、色々なソフトのプログラムを作っていく、そういうプログラムの中にジオの視点や、外部の人の活動を結び付けていくことが必要。ビジターセンターをリニューアルするタイミングと認定を目指すタイミングが重なっているの、そこをどう結びつけて良いものにしていくかということが、ジオパーク全体の活動がアップすることにつながり得る非常に重要な部分かと思う。そこに具体的なアドバイスを出していけると良いのではないかな。

委員長：ありがとうございます。審査結果報告書に具体的な良い点や、今後改善してもらいたい点などが書いてある。

部会長：審査に行って、現地審査でほかの審査員も含めて、ジオパークってこういうことが大事なんだよとか、例えば武家屋敷のところに、火山の石の上に海で円磨された丸石がたくさん並べられている。曲者が侵入するときに、その石がガラガラ落ちるので、用心になる。その武家屋敷の石垣がものすごく美しい。それが文化遺産としては認識されていても、それがジオパークのジオとどうつながるかという、そういったところがまだない。今回現地審査しながらみなさんとディスカッションして、ここはジオパークとして面白いということをお話しして、その部分では、関係者の皆様にとって大きな気づきがあった。聞くところによると、今色々なジオパークを訪問したり、ガイドさん同士で勉強会を進めたり、ということをされているので、そういう部分を応援していけば、すごく良いジオパークになるかと思うので、その辺りはやっていけたらと思っている。拠点についてもご指摘のとおり、色々な文化や世界遺産との関係、環境省の国立公園の取組など、様々な枠組みを上手に使う、相乗効果を高めていくというのは、ここでも重要な視点だと思う。そこは、是非やってもらえたらと思う。

委員：現地で地球科学だけではなく、色々な面で学術的なサポートをしてくれる体制や人はいるのか。

部会長：このジオパークを作るにあたっては、九州大学の地質の先生がリードされたということだが、現地で手厚くサポートしている先生が、九州大学の環境社会学の先生、あとは亜熱帯の植物を専門にされている先生、この2人がジオパークや勉強会で話題提供をされたり、一緒にフィールドに行って色々なアドバイスをされているということで、非常に熱心にはされている。ただ、五島列島自体の科学的な調査や文献が、そんなにたくさんあるわけではない。できれば色々な研究者の人にもっと入っていただいて、ジオパークに資する、あるいは五島列島全体の自然像を明らかにするような研究も、ジオパークの整備とともに進めていきたいという話は伺った。

オブザーバー：プレスリリースの案を見たが、よく仕組みが分かっていない人から見ると、桜島・錦江湾の保留と、五島列島の見送りの差が分からないので、ものすごく大きなものに囚われる可能性や、嫌なハレーションが起こる可能性を否定できないと思うが、その辺をどう説明するのか。

委員長：今までも記者発表をしているが、これまでにそういった質問がなかったの、意識はしていなかった。

オブザーバー：桜島・錦江湾は保留というレベルでとどまっているが、五島列島はそれがもう一段低い見送りという状況の、差をどうやって説明するのか。つまり、五島列島がこの部分について、よりできていないから見送りなんだというような説明を、聞かれてもおかしくないのでは。

委員長：その説明は可能。保留の桜島・錦江湾の場合には、1年以内に改善できる2つのことをしていくということ。それ以外の部分に関しては、よくやっていますねという評価。見送りの場合は、色々なレベルの程度がまだ出発段階であるということで、1年以内に改善されるという見通しはありませんということ。

オブザーバー：2年以上のイメージか。

委員長：早くて2年。

オブザーバー：承知した。

部会長：今のご質問の中で、ジオパークの中で特に大切なのはジオガイドさんの養成だと思う。色々なジオパークのところでは、1年から1年半以上かけて、ジオパークのガイドさん養成プログラムを作って、そして

フィールドワークや色々な講座を重ね、実地のガイディングの練習をしたりということも含めて、ジオガイドを育てていく部分でも時間がかかるということ。それと、ビジターセンターが来年から設計に入ることなので、そういう部分でも、少し時間をおいて、そういったものを整備されてきた時点でもう一度審査に当たったほうが、ポジティブな結果が出るのではないかと、という意味。今回は、本当に準備が始まったね、というイメージであるということ。

委員長：それでは提案のように、五島列島構想地域は見送りということによろしいか。

各委員：異議なし。

<記者発表資料確認>

(プレスリリース資料の文面を確認。)

<議題④JGCの今後の体制について>

委員長：JGCの今後の体制について、現体制で1年間やってきた訳だが、委員の任期は今年度で終わる。

この機会に、体制に問題があれば検討して、次の新規の来年度の委員会に臨みたい。問題は何かということ、これまで調査運営部会と本委員会と2階建て構造でやってきたわけだが、その中で今のような議論をしているときに、調査運営部会で議論されたことがもう一度ここで議論されるなど重複がある、あるいは調査運営部会で議論したことが委員会に十分報告されていないなどのもどかしさがある。特に、現地審査に行った人がいない中で審議するのは難しいことがある。やり方としては2階建て構造をやめ、委員会でもっと時間をかけて議論したほうが良いのではないかとという声がある。そうなった場合、委員の構成をもう少し膨らませないといけないと思う。委員会で議論するとなると、時間ももっと必要。そういった中で、各委員の意見をお伺いしたい。まず調査運営部会長から。

部会長：委員長がおっしゃったとおり、昨年から委員会の中に調査運営部会が設置され、基本的には調査運営部会員を中心に、一部JGC委員も含めて、現地審査員を派遣している。現地審査も新規認定や再認定など色々あるが、現地審査後も、調査運営部会で現地審査報告書やプレスリリースの原稿など、色々な書類を作ってJGCに報告をするということになっている。2階建てというのは、JGCが親委員会で、調査運営部会が色々作業をして、諮問があって答申する、といった立場になるかと思う。新規もそうだが、再認定も件数多くて調査も色々大変。今日のJGCでも、調査運営部会での議論による案をお出しして、皆さんに議論してもらっているということだが、部会長と副部会長がこの席で現地審査した報告書を、現地の審査員に成り代わって報告をしているが、全てきちんと伝えられるか、または色々な現場の空気やニュアンスというのは、行った方でないと伝わりにくい部分もある。JGCで議論されて、また議論の結果が差し戻しとなったこともある。行ったり来たり作業が大変。もっと正確にジオパークを目指す人たちに伝えられるような、そういう審議の体制をもう少し工夫をできたら良いのではないかと思う。調査運営部会としては、審議の仕方なども含めて、皆さんと議論していただくと大変ありがたい。

委員長：ありがとうございます。調査運営部会からの意見へのコメントか、または他の意見でも、何かないか。

委員：申請書は事前に読んでこられるわけだが、紙だけでは伝わらない。実際現地に行って見てきて、現地の人とやり取りした様子を、時間が限られている中で私たちは聞いて、コメントすることだが、現地で見えてきたこととか、地元で話してきたことやそのやり取りの様子は、もう少し聞いた上で議論できると良いとは思っていた。

委員：おっしゃるとおり現地で聞いてきた雰囲気を知りたい。ただ、限られた時間でもあるので、一部合同のような形で会議が開かれるのは、一番分かりやすいのかと思う。ただ、完全に一緒にしようとするので、時間を要するので、可能ならば一部合同のような形が良いかと思う。

委員：現地審査にも関わっているが、長くやっていることもあり、短い報告でも分かるころはある。ただ、新しく委員になられた方などは、まだ審査の現場もよくご存じない場合も多いかと思う。それが少し気にな

っていた。どうやって解決したら良いのか、今の体制が良いかどうか分からないが、良いご判断をもらうためには、情報量がないというのは少し問題であろう。この委員会自体がジオパークを良くしていくための重要な判断をしていかなければいけないので、ジオパークの現場の情報をできれば現地に行って、つぶさに見てくるのが一番だろうが、全部を見るというのは不可能なので、ある程度時間を割いて聞きたい。特にかなりの方が新しく入れられたということもあるので、それはなんとかしないとイケないなど。

委員：去年から初めて委員にさせていただいて、現地調査に一度行かせていただいたが、3泊4日のうち一部だけ行かせてもらった。実際に納得がいくような仕事をするには時間をかけないとイケないが、しんどい面もある。

副委員長：私個人のことと、全体のことと両方あるが、文化担当ということでここに座っているが、何をしても良いのか分からないところがある。コメントを含めて。現地調査の報告については、もしこの場に現地調査に行った方がいないという案件があった時は、どなたか一人来ていただくと、質問した時に現地に行った方が答えられるような状況にしておくと思う。

委員：審査まで行くと、時間を相当使わないとイケない大変な仕事。最初日本ジオパーク委員会を始めたときは引退された先生が多く、やってもらいやすかったところがある。今は現役の方がたくさんいらっしゃるので、審査に行くとなるとなかなか難しい。一部合同というのも一つのアイデア。

副会長：報告する側なので愚痴にならないようにしたいのだが、自分自身も行っていない地域の活動を、部会での議論をまとめて報告していくというのは結構大変。エッセンスを伝えきれていない可能性がある。実際現場に行かれて、地域の方々や、特に運営体制なんかは研究者が見抜くのは難しいので、それを体感されている方が報告するのが一番良いとは思っている。また、どうしても地形や地質だけの人間がいると、地球科学的価値は見られるが、文化的なもの歴史的なものというものの評価ができない。なので副委員長には、文化がそういうところで地域にこういう価値があるのだとか、ここにはこういう背景があるということコメントいただくと、私たちが評価しているものが当てずっぽうであるのかそうでないのかを評価できるので、そういう意味でのご助言をいただきたいと思っている。

委員長：私としてはなかなか難しいとされていて、全部一緒に会議があると、とんでもない時間がかかる。半分以上の委員が出席すれば良いが、なかなか厳しいという気がする。一部だけ出てくるというのも、この部分は全員出てこないといけないなどが決められたら良いが、そう簡単ではない。最後だけ総会のようになってしまうと、それだと今と同じ。良い解決法はあまりないが、合同会議式にするというのも一つの手だし、部会を廃止するというのも一つの手だと思う。事務局から提案というものはあるか。

事務局：部会と委員会を一つにしていくということだが、あくまでも委員会の会則の中で、部会の扱いを変えるということはあるが、委員会の会則は変えないという形で、委員の数が増えていく。それで、実際部会には14名の部会員がいて、皆さんいつも1泊2日または2泊3日程度の時間をかけて議論いただいているところもある。その上で委員会を開催し、1泊2日。経費の面から申し上げると一つにまとまってやっていると、経費的には大変運営しやすくなる、という点がある。そのためには、今の委員会の委員を増やすと、今10名の委員の皆様がいらっしゃるが、そこに何人か増えていくということが考えられるかと思っている。あくまでも現段階では、委員会の方でそういった課題に対して、対応を変えていくということだけを決めてもらえば、そのあとまたもう少し具体的な形をご提案したい。

委員長：2階建てをなくすということは、委員の拘束時間はものすごく長くなるということ。その辺も覚悟してやるということか。

事務局：その点に関しても、会議に最初から最後まで全部出るのが必要なのか、それとも、副委員長がおっしゃるように部分的に自分の関連するところ、ここだけは出なきゃいけないとか、そういった調整は可能だと思う。日程的には1日ではなかなか難しくなる。夏の審査は、今日も3地域の審査だが、秋の審査は9地域になるので、そのことを考えると、全ての時間出席することが良いのか、人によって全ての審査に出席いただかないと困る方もいらっしゃると思うが、専門の分野ごとに分けて出席いただくということでも対

応は可能かと思う。

委員長：いずれにしても、もう少し効率的に、かつ情報がきちんと伝わるような仕組みを次回提案したい。具体的内容については私に一任していただいて、関係者と相談して案を提案したいと思う。次回、提案して承認されれば、それに基づいて委員の構成を考えて、公募に入るという手続きで、来年度に間に合うようにしたい。今ある委員会の規則は変えない、その中で、効率的にできる方法を探したい。ということでよろしいか。

各委員：異議なし。

<その他確認事項等>

委員長：その他の確認事項等として、まずユネスコ国内委員会の方からコメントをいただきたい。

ユネスコ国内委員会事務局：ユネスコ国内委員会の動きについて、ご紹介をさせていただく。ユネスコの国内委員会は、基本的には、法律に基づいて設置されているものだが、日本におけるユネスコ活動の促進を図るというようなことについて、審議いただいている団体になっている。こちらのほうで、先日9月12日に国内委員会の総会が開催されたところだが、今年はユネスコ本体の方で2年に1回の総会が開かれる年になっており、基本的に全加盟国が総会に出て、最高意思決定機関ということで総会が開催される年になっている。それに向けて、答申という形で今後どう対応していくのかについての意見交換を9月12日に行った。その中で、日本のユネスコ活動について、さらに国内委員会として、こういうことをやるべきだという意見として、建議ということを各大臣に対して出しましょうということが決定されており、近く、会長一任になっているが、建議の内容、答申の内容が公表される予定になっている。ここでは、どんなことが盛り込まれているかというエッセンスだけ紹介したい。日本の中でユネスコ活動を70年近くやってきているところだが、地域の活性化というものをもっと進めていく必要があるということ、学際的、包摂的アプローチに基づいて、色々な事業の主体、様々なステイクホルダーをもっと増やしていき、連携を進めていこうといったことが提言されている。ジオパークの活動も、ユネスコファミリーの中の事業という位置づけになっているので、ユネスコの本体の方でも、国連の機関の一つとしてSDGsに貢献するような活動を推進するということ、すごく大事に思っているというような政策があるので、国内の中でもジオパークもSDGsを意識した活動も多くあるし、地域の活性化のために、どういう風に、いろんなステイクホルダーを教育していくかということが、必要になってきているということは、みなさん活動の中で考えられているので、それを応援していきたいという思いで、案が考えられているところ。建議だが、今言ったようなエッセンスが入ってきて、地域の活性化とユネスコ活動というような項目の中で、5つ程の柱で、こういうことをやったほうが良いと言われているものがある。一つ目が、SDGs達成に向けた、持続可能な開発のための教育をもっと推進しましょうといった話と、二つ目は2021年から国連の方で海洋科学の10年に向けた推定がされているが、その活動に向けた活動の活性化、三つ目が加盟国機関の友好と相互理解促進のためのユネスコ改革への貢献ということで、ユネスコも今どんどん変わっていくということで、それに合わせた活動を日本の中でも推奨していこうという話し。四つ目が、ユネスコ活動のメリットを生かして、地域の創生や多文化共生社会の構築を図りましょうと、まさにここはジオパークに一番関係するところだと思う。最後の5つ目に、多様なステイクホルダーの連携を深めるために、戦略的なプラットフォームを構築していこうということで、出たところなので、これらの話し合いを見せつつ、文部科学省の中でどういったことができるかということ、今後検討していきたい。

委員長：ありがとうございます。プラットフォームというのは具体的に何を指しているのか。

ユネスコ国内委員会事務局：地域で今、ジオパークや世界遺産、色々なユネスコ協会、草根の色々な活動等のユネスコの冠が付いた事業が色々あるが、それ以外にも民間の企業にもう少しユネスコ活動に入ったりとか、色々な担い手を増やしていくために、そういった情報を包括的にプラットフォーム的にできるところを増やしていこうということ。今後どう具体化するのかというのは検討中。

委員長：ありがとうございました。今の報告について何かないか。特になければ事務局から。

事務局：今後の予定として、10月13日、14日にJGCとしての研修会を糸魚川ユネスコ世界ジオパークで開催する。また、次回のJGCは12月25日（水）に開催。審査基準検討会議は2020年1月31日（金）開催予定。

委員長：以上で議事がすべて終わるわけだが、ご意見ご質問等ないか。渡辺委員、カウンスルミーティングの件をお願いします。

委員：カウンスルミーティングに関して、68地域審査した。カウンスルメンバーでは68地域分の申請書と、現地審査の報告書を読む必要があり、なかなか大変で、2日半丸々かかった。だんだん、これは引き受け手がなくなるんじゃないか。そうすると、ユネスコの肩書が欲しい人というのが世の中にはいて、そういう人が来るようになる。真っ当な学者は、来てくれないんじゃないかというような心配がある。そういう状況になってくると、審査も現地審査員の感触なんて気にしていられなくて、報告書を読んで、紙の上で判断するしかない。そうすると、なかなか厳しい判断が最近出にくくなっている。紙だけでこれはダメだね、というのはなかなか難しい。以前は候補地も少なくて再認定も少なくて、審査に集まっている人が誰かそこに行ったことがあったりして、現地での感触みたいなものも含めて、審査していたところもあって、報告書はオーケーといっているのに、厳しい結果が出るなんてこともあったが、そういうことはなくなっている。今年の結果を見ていただくと分かるが、新規の場合でも絞るものは絞ろうと、再認定審査は、今年は結局36地域のうち35地域はそのまま通している。そうなりつつある。これが良いか悪いかは分からないが、今後はそういう傾向で審査が進むのではないかと思う。私は今年で任期が終わるので、これまでは、昔世界ジオパークネットワークが審査していた頃から関わっていた人がかなり多かったが、だんだんそうでなくなると思う。そうなった時にまたどうなるか、審査の傾向が変わるのか変わらないのか。本来はガイドラインに従って、審査しているので傾向なんて変わるはずがないが、人がやることなので。もう一点、学術会議の日本地球惑星委員会の下に、IUGS分科会というものがある。IUGSとは、国際地質科学連合という基本的には地質学者の集まりで、ジオパークの科学的な部分を扱ってる団体。中田委員長や佃委員、齋藤委員、私が入っているが、そこでジオパークに提言まではしないまでも、意見を公式に残そうという動きがある。この4人には委員会のメンバーになっていただきたい。また、JGCの皆様にもご協力いただくことがあるかもしれないので、よろしく願いしたい。

委員長：その他何かないか。（質疑等なし）本日はありがとうございました。